

トルストイ作品における«comme il faut»の概念

大川 良輔

19世紀初頭のロシア貴族にとって、フランス語が一般的な意思疎通の手段であったことは良く知られている。多くの19世紀ロシア文学の作品中にしばしば用いられる«comme il faut」というフランス語の概念は、貴族の価値観を端的に示すものである。この用語の持つ意味やニュアンスは、時代によって、また作家の個性によって大きく異なる。

他の同時代の作家達と比べて、トルストイはこの概念に特に強く執着しており、自伝三部作以外にも、他の多くの作品や日記、回想の中で繰り返し用いている。それはトルストイがこの言葉の中に、19世紀のロシア貴族が抱えている深い問題点を感じ取ったからである。

数多のロシア文学作品の中に用いられる、この *comme il faut* という概念に関する研究は現在に至るまで手付かずの状態に残されている。本論では、第1章で広大な19世紀ロシア文学の作家達が *comme il faut* という語句をどのように用いていたかを大雑把に俯瞰し、次いで第2章で、トルストイの自伝三部作におけるこの概念の描かれ方を検討する。第3章では、トルストイが強い影響を受けた J.J.ルソーとの関係を追い、最後に第4章において、トルストイが *comme il faut* の概念を用いて何を表現し問題としたのかを、自伝三部作以外の作品との比較を通して検討する。

1. 19世紀ロシア文学の中に現れる«comme il faut»

comme il faut というフランス語は、直訳すると「そう有るべき様に」あるいは「必要なように」という意味になる。¹ 19世紀ロシア文学においては貴族らしさを示す用語として使われた。多くの作品の注釈の中で、もっとも頻繁に当てられているロシア語は、*приличный*（礼儀正しい）という語であるが、Ю.М.ロトマンはプーシキンの『エヴゲーニー・オネーギン』の注釈のなかで、この概念を *порядочный*（きちんとした）、*приличный*

¹ *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle* の用法によれば、*comme il faut* とは、「物については、『よく整えられた』、人物については『気品ある、高雅な、上流階級の』の意であり、元来金を持っているかそうでないかには関係なく、他者より秀でた才能を持っている人物をさした。Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle, Deuxième partie* (Genève: Slatkine, 1982), p. 710.

(礼儀正しい)、「как должно」(然るべく)などの多くのロシア語を当てて定義している。² この語句は正確にロシア語に翻訳することの出来ない、ある種のニュアンスを表す言葉であり、翻訳不可能な概念であると言える。

1-1. 精神性、生き方の規範としての *comme il faut*

comme il faut の概念をロシア語に翻訳することの困難さをもっとも顕著に表している例えば①の引用。この一文の末尾でプーシキンが皮肉まじりに明言しているように、この *comme il faut* という概念は翻訳が不可能なほどの幅の広い意味を内包している。多くの作家達が、ロシア語ではなく敢えてフランス語のままこの語句を用いたということに、その観念の持つ曖昧さと、この当時貴族階級の中にこの語句と概念が広く浸透していたことを証拠づけている。

- ① 彼女は悠然として、冷やかかでもお喋りのようでもなく、誰に高慢な眼差しを向けるでもなく、成功をてらうでもなく、少しの気取った身振も見せず、身に付かない趣向を凝らすでもなかった。[…] 全てが物静かで、ありのまま、*comme il faut* の正確極まる複製のようだった […] (シシコフ閣下、平にご勘弁を。この外国語をどう翻訳すべきか、私には分らないのです)。(プーシキン『エヴゲーニー・オネーギン』、1823–1831年)³

引用部分は、ヨーロッパ放浪の後、かつてオネーギンがふったタチヤーナに再び出会う場面である。かつての田舎娘は、いまやペテルブルグの社交界の花形になっており、あたかも夜会の女王のような存在感を見せている。興味深いのは、プーシキンの *comme il faut* 観は、他の作家達の *comme il faut* 観とは異なり、服装や身振りなどの外面的なことではなく、精神性や、生き方の規範といったような内面的なものに重点が置かれているということである。

- ② […] 君も知っているとおりに、ぼくはモスクワの令嬢の匂いのすることを、*comme il faut* でないことを、*vulgar* (俗悪) なこと全てを嫌っているのだ。[…] うちへ帰ったとき、君のかわいい、飾り気のない、貴族的な物腰が変わってしまったのを見つけたら、ぼくは絶対に離婚して、悲嘆のあまり兵隊になってやる。(『プーシキンの妻への手紙: 1833年10月30日、ボルジノ村からペテルブルグへ』⁴)

②に引用したのは、プーシキンの妻にあてた書簡である。重要なのは、この *comme il faut* という概念が、彼の中でペテルブルグと分かちがたく結びついている点である。

² Лотман Ю.М. Роман А.С. Пушкина “Евгений Онегин”: Комментарий: Пособие для учителя // Лотман Ю.М. Пушкин: Биография писателя; статьи и заметки, 1960–1990. СПб., 1995. С. 715.

³ Пушкин А.С. Полное собрание сочинений в десяти томах. Т. 5. М., 1957. С. 171–172. 日本語訳は大川による。引用文中にあるアレクサンドル・シシコフ (1754–1841) は、文学者でアカデミー総裁だった海軍大将。『ロシア語における新旧両文体を論ず』(1803) で文学者らによるフランス語法や新語の濫用を攻撃した。

⁴ Пушкин А.С. Полное собрание сочинений в десяти томах. Т. 10. М., 1958. С. 454.

1-2. ペテルブルグと結びついた *comme il faut*

ゴーゴリの『死せる魂』に描かれる *comme il faut* の概念も、プーシキンの描いたものと同様に、ペテルブルグと結びついて現れる。当時の上流社会、社交界の中心、当然当時のモードは、服装から立ち居振る舞いまでモスクワではなくペテルブルグから発していたため、*comme il faut* の概念に上流社会＝ペテルブルグという点が内包されている。

- ③ この時、レニーツィン夫人である若い主婦が部屋に入って来た。青ざめて、痩せて、背の低い女だったが、その代わり服装はペテルブルグ風で、*comme il faut* が大好きな性質だった。
(ゴーゴリ『死せる魂』⁵、1842年)

1-3. 肯定的評価

ツルゲーネフの描く *comme il faut* は、概して肯定的なニュアンスが付加されたものであり、貴族的な振る舞いの規範として描かれる。

- ④ ——でも、あなたは議論はまるで駄目なのね、アフリカン・セミョーヌイチ！——とダリーヤ・ミハイロヴナがたしなめた。彼女は内心では、この新しい知人の落ち着きと優美な礼儀正しさとに、すっかり満足していた。『これは *comme il faut* な人だ。』——好意をもった注意をもってルーヂンの顔を見て、彼女は考えた——目をかけてやろう。(ツルゲーネフ『ルーヂン』⁶、1856)

- ⑤ その次の朝、お茶におりて行くと母は小言を言った […] 「いずれにしてもあの人たちは *comme il faut* な人たちじゃありません」と母は言った。「お前もあんなところに入出入りする用は無いんだから、そんな暇があったら、試験勉強のほうをしっかりとやらなければなりませんよ。」(ツルゲーネフ『初恋』⁷、1860年)

1-4. 戯画化の手法として

プーシキンやツルゲーネフらの引用においては、貴族の振る舞い、行動の規範として、肯定的な意味合いを付加されていた *comme il faut* という語句を、ドストエフスキーは完全に否定的なニュアンスで皮肉たっぷりに用いる。

- ⑥ マリヤ・アレクサンドロヴナは、いつも非の打ち所のない *comme il faut* でもって、私たちの間でも際立っていたので、みんなが彼女を模範とするくらいだった。この *comme il faut* にかけては、モルダースフの町で彼女に匹敵する女はなかった。例えば、彼女は何かしらほんのちょっとした一言で競争者を叩き伏せ、八つ裂きにし、殺してしまうことができ、私達もそういう場面を目撃したものである。そのくせご当人は、自分がそうした一言を発したのには気も付かないような振りをしているのだ。こうしたやり口は、周知のごとく、もはや最上流の社

⁵ Гоголь Н.В. Собрание сочинений в десяти томах. Т. 5. М., 1994. С. 427.

⁶ Тургенев И.С. Собрание сочинений. Т. 2. М., 1949. С. 25.

⁷ Тургенев И.С. Собрание сочинений. Т. 7. М., 1949. С. 22.

会に属するものである。(ドストエフスキー『叔父様の夢』⁸、1859年)

- ⑦ ブランシュは自ら彼のネクタイを結んでやり、自らポマードを塗ってやったりしたので、燕尾服に白いチョッキ姿の彼は、とても *comme il faut* に見えた。

「Il est pourtant tres comme il faut, (それにしても、彼はとても *comme il faut* だわ)」

まるで将軍がとても *comme il faut* だという考えが、当の彼女さえ驚かせたように、将軍の部屋から出ていきながら、ブランシュ自身が私に告げた。(ドストエフスキー『賭博者』⁹、1866年)

⑥と⑦の引用では、ドストエフスキー流の人物の戯画化の手法が見られる。*comme il faut* の表層面を模倣しようとする愚劣な人物たちは、上品に振舞おうとすればするほど、その滑稽さを増す。

1-5. 貴族性の衰退

引用⑧のゲルツェンによる文章では、*comme il faut* は、「品行方正な人間」という意味で使われている。ここではすでに、この語の持つ貴族性自体が薄れ始めている。

- ⑧ ベルナツキは七十歳をはるかに越えていたが、驚くほど若々しくて、友人たちと食事をしたり、夜は二時ごろまで起きていたり、時には一、二杯のワインを飲んだりすることが好きだった。[...]『ベルナツキさん』私は入り口の部屋に入りながら冗談に彼に言った。『あなたはいつになったら年をとりはじめるのです?』『un homme comme il faut (ちゃんとした人間は)』と彼は笑いながら答えた。『年はとって、決して老け込まないものですよ!』彼は最後までその性質を持ちつづけた。そして育ちの良い人間にふさわしく、寛容に生命に別れを告げた。彼は朝に気分が悪くなり、夕方亡くなった。(ゲルツェン『過去と思索』¹⁰、1852-1868年)

さらに時代が下り次の引用⑨のチェーホフの文章では、貴族性はより希薄になっていく。

- ⑨ 私はイギリス人のように礼儀正しいのよ。私はあなた、いわゆる自分を怠けさせないということよ。だからいつも身なりだって髪だって *comme il faut* なのよ。ほらこの通り庭に出るのだから、部屋着のままだったり髪も結わないで家から出てくるようなことをするのでしょうか? いいえ、決して。(チェーホフ『かもめ』¹¹、1895年)

以上年代順に眺めただけでも、19世紀ロシアの作家達の間において、この *comme il faut* というフランス語が、極めて幅広い意味で用いられていることが分るが、ツルゲーネフに代表されるような一般的で、肯定的な貴族的行儀のよさ、行いの正しさといった意味の *comme il faut* と、その反動としてのドストエフスキーによる *comme il faut* への皮肉は、あ

⁸ Достоевский Ф.М. Собрание сочинений в десяти томах. Т. 2. М., 1956. С. 273.

⁹ Достоевский Ф.М. Собрание сочинений в десяти томах. Т. 4. М., 1956. С. 421.

¹⁰ Герцен А.И. Собрание сочинений в тридцати томах. Т. 11. М., 1957. С. 130-131.

¹¹ Чехов А.П. Полное собрание сочинений в тридцати томах. М., 1978. С. 21.

る意味で表裏一体の関係性を持っている。両者の *comme il faut* 概念はお互いに、貴族特有の振舞い、態度という点で一致している。しかし彼らから少し時代を経たチャーホフにいたると、この *comme il faut* の概念の持つ最も重要な貴族性の要素が薄れていく。⑨の引用で挙げた『かもめ』の例では、貴族的であるというより、むしろ身嗜みの良さを示す語句になっている。ここでチャーホフによって描かれているのは、すでに没落しつつある貴族社会であり、いわば、貴族的概念として定着していた *comme il faut* の残滓であるともいえる。次章でとり上げる、トルストイの *comme il faut* 観が強く現れている自伝三部作は、時代的にはツルゲーネフやドストエフスキーらと同時代に分類されるものである(執筆年は、それぞれ『幼年時代』1852年、『少年時代』1854年、『青年時代』1857年)。

2. トルストイの自伝三部作における「*comme il faut*」の概念

第一章で示したように、*comme il faut* とはある種の貴族的雰囲気であり、はっきりと「こういったものだ」とはいえない。トルストイは特に、『青年時代』において「*comme il faut*」と題された章を設け、この概念について詳細に文章化しようと試みる。そして *comme il faut* を詳細に文章化することによって矮小化し、さらに貴族性自体をも卑下しようとする。

『青年時代』で定義された、ニコレーンカの考える *comme il faut* とは、要約すると次のようなものになる (T. 2. C. 173)。¹²

- ① 優秀なフランス語会話の能力。特にその発音の美しさ。
- ② 綺麗に掃除されたつめ。¹³
- ③ 会釈したり、ダンスをしたり、会話したりする技能。
- ④ 一切に対する無関心の表情、倦怠感。

ニコレーンカは *comme il faut* という概念を、定義化しようとした。その際精神面ではなく、外見的で表面的な部分に重心を置く。そして一般民衆と“高貴な”自分を区別する分類法として用いる。

物語の中で、主人公ニコレーンカはすべての人間を *comme il faut* な人間と *comme il faut* でない人間とに分類し、*comme il faut* でない人間とは関係を持たないのみならず、彼らを侮辱し、蔑視することも自らに課した。『青年時代』でこの概念が具体的な形を伴って描かれるのが、ニコレーンカの大学入学後であることも無関係ではない。大学は貴族たちと雑階級人たちが共同で学び、生活する特殊な場であった。その際、貴族階級の学生たちは、自らの雑階級人たちへの優位性と差異を誇示するために、貴族的な振る舞いや社交界でのマナーなどを、より意識するようになる。¹⁴ 『青年時代』のニコレーンカも大学に入学した当初は、周囲の貴族的でない学生たちを侮辱したり無視したりして、彼の定義する *comme il faut* の概念に当てはまる者たちと小さなサークルを作り生活する。

¹² トルストイの作品の引用部分は全て *Толстой Л.Н. Полное собрание произведений в 90 томах. М.-Л., 1928-1958* により、括弧内に巻数とページ数のみ記す。

¹³ トルストイの多くの作品において、爪、あるいは手や足など、主に体の一部分と貴族性が結びつく傾向がある。

¹⁴ *Ирина Паперно. Семиотика поведения: Николай Чернышевский-Человек эпохи реализма. М., 1996. С. 66.*

三部作において、主人公である子供のニコレンカは貴族階級の世界の中に生活し、完全なる貴族になろうとして苦心する。しかし、作品全体を通じて語り手である大人のニコレンカはこの貴族階級の生活と習慣について非常に憤りを感じており、まったく否定的に描いている。

『青年時代』において、主人公ニコレンカは貴族的な理想の大人像としての *comme il faut* に夢中になっているが、語り手の大人のニコレンカは *comme il faut* の概念を、自己中心的で排他的なものとして、強く批判する。先に挙げた第 31 章「*comme il faut*」の冒頭に次のような（大人のニコレンカによる）記述があるのは非常に興味深い。

私はこの物語の中でもう何度か、このフランス語の表題に当てはまる観念を暗示したが、今それに全章をささげる必要があると感じる。なぜなら、それは教育と社会とが植え付けた虚偽の観念のひとつ¹⁵ で、私の生涯にもっとも有害な作用を及ぼしたからである。（『青年時代』、T. 2. C. 172）

引用部で、語り手ニコレンカははっきりと *comme il faut* を有害なものであったと断定している。幼い少年による貴族性への傾倒と、大人の語り手による貴族性への嫌悪の落差が明らかにされ、そのコントラストによって、この貴族性なる曖昧な概念の表層性と、無意味さが強調される。そしてこの概念の核は、貴族階級の中で教育と社会とによって植えつけられ、幼いころから彼の中で形作られていく。

主人公ニコレンカは幼いころから他者のまなざしを意識し、他人にどのように見られているか気にかけている。主人公を見つめる他人のまなざしが『幼年時代』の作品内では、強い自尊心と、その反動としての恥ずかしさの感覚と密接に関係している。そして物語が進むにつれて徐々に肥大していく〈自尊心〉や〈羞恥心〉は、自分が貴族であり、他者とは異なる人間であるはずだという自負心と、他者に馬鹿にされないような振る舞いをするべきであるという意識と結びつき、究極的に『青年時代』における成長したニコレンカの意識の中で、*comme il faut* という貴族の理想形を作り上げることになる。

トルストイの『自伝三部作』において、少年ニコレンカは、常に子供に見られたいという願望を抱き続ける。そんなニコレンカにとって、理想的な大人のモデルは兄ヴォロージャの友人ドゥブコフであった。『少年時代』では、「大人」であることと *comme il faut* が、分ちがたく結びつき、直接的に描かれる。軍人ドゥブコフについての次の描写は興味深い。

ヴォロージャと私にとって、ドゥブコフは二重の魅力を——軍人らしい容姿と、特に年齢という魅力を持っていた。人間はどういうわけか年齢を *comme il faut* という概念と混同する習慣があり、若いころにはそれを非常に高く評価するものなのだ。それにしても、ドゥブコフは本当に *comme il faut* な人間だった。（T. 2. C. 67-68.）

¹⁵下線部強調は大川による。

社交界においては、「大人」であることが *comme il faut* な人間だとみなされ、寧ろ若さは軽蔑の対象とさえなる。しかし、「*comme il faut* な大人」になりたいという幼いニコレンカの願望自体は、全て他の貴族の子弟の物真似であり、彼が自ら選んだものではない。主人公の周りを取り巻く他の貴族の持つ表面的な特徴（*comme il faut* の四項目）の模倣は貴族社会という環境と、その内部に生じた環境と教育の結果であるといえる。

さらに、『青年時代』の中で最も重要な、*comme il faut* な人間と *comme il faut* でない人間の「選別」の描写は、初稿段階ではドゥブコフの思考の模倣として描かれている。

人間の全ての種類は、ドゥブコフの言を借りれば、*comme il faut* な人間か、*comme il faut* でない人間しかおらず、後のものは私にとってはまったく存在しなかった。私は素朴な民衆については話もしなかった。[...] 私の頭には、情熱的で、*noble* で、*comme il faut* であるという三つの性質のほかには、世界ではこれ以外に何者かに成らねばならないなどは思いもしなかった。私は *comme il faut* それだけで十分であるし、私が幸せであれば、全てのものが満ち足りているべきであると思っていた。(T. 2. C. 327)

自伝三部作の中で *comme il faut* の象徴としてのモデルは、トルストイ家の遠縁であり、1847年に妹マリアと結婚したワレリアン・ペトローヴィッチ・トルストイであるとされる。トルストイとワレリアンは、父の死後すぐの1838年に初めて出会う。後年ビリュコフのインタビューに答え、トルストイは「シベリヤ総督ピョートル・ドミートリエフ・ゴルチャコフと、その副官のワレリアン・ペトローヴィッチが訪れ、私は彼の美しさと、騎兵隊のパンタロンに熱中した」(T. 34. C. 401)と振り返る。当時十歳の少年だったトルストイはワレリアンに心酔していた。¹⁶しかし自伝三部作を執筆し始めた1850年代のトルストイの目には、ワレリアンは「女のしりを追い回すだらしない男、嘘をつく」(T. 43. C. 193)人物と映じる。Т.А. Кузминскаяの回想でも、実際彼は「身持ちの悪い生活を送っており、機会があれば不貞をはたらいた」¹⁷。さらに1853年の日記には、「彼には、私にとっては、人に出会うときに欠くことのできない、デリケートな高潔さの感覚がない。人の物腰と外見を笑わないという節度がワレリアンに欠けている」(T. 46. C. 168)と記されている。

トルストイは少年時代に完璧な *comme il faut* な大人の見本として、ワレリアンに心酔し、後にその不誠実さと愚かさを悟る。この人物がトルストイの実生活と創作活動に大きな影響を与えたことは間違いないが、トルストイの家族、兄弟たちもその影響下にあった。後の1899年の、次兄セルゲイからレフへの手紙をみてみよう。

[...] 私たちが育ってきた環境、ワレリアン・ペトローヴィッチの例や、当時のあらゆる生活秩序の模範が [...] 全て、愚かで恐ろしいことだと気づくのは難しかった。お前はこれを、私より早くに気づいていたけれども。¹⁸

¹⁶ 最初の出会いのときワレリアンは25歳だった。当時10歳だった少年トルストイにとっては、美しく、遊びなれた25歳の男性は、まさに *comme il faut* な大人として見えたに違いない。完成稿では削除されたが、『少年時代』第一稿にも「ドゥブコフは25歳ほどの人物だった」(T. 2. C. 292)とある。

¹⁷ Кузминская Т.А. Моя жизнь дома и в Ясной Поляне. М., 1986. С. 386.

¹⁸ Переписка Л.Н. Толстого с сестрой и братьями. М., 1990. С. 424.

トルストイは社交界という歪んだ環境の中で、ワレリアンたち貴族たちが唯一正当なものを見なす当時の生活秩序を、愚かで恐ろしいものと認識していた。そしてこの歪んだ世界に対置して「幸せな幼年時代」が提示される。

『自伝三部作』の物語の中で描かれるのは、幼い純粋な子供の「幸せな幼年時代」が、他者に良く見られたいという願望、次第に膨張する自尊心のために傷つけられていく過程である。第一作目『幼年時代』で大人の語り手によって「二度と帰らない」幼年時代の純粋さが強調される。

私たちが幼年時代にもっていた、あのすがすがしい無心な気持ち、愛の欲求、信仰の力、これらのものはまたいつか帰ってくるだろうか？二つの最も優れた美德——無邪気で快活な心境と、限りない愛の欲求とが、唯一の生活の動因であった、あの時代よりも美しい時代が、果たしてありうるだろうか？（『幼年時代』、T. 1. C. 45.）

奇妙なことだが、どういうわけか、私は子供のときには、大人に似ようと努めていたものだったが、もう子供でなくなってしまうと、今度は子供らしくなりたいという望みをよく起こす。セリョージャとの交渉においても、この子供らしく見られまいという望みが、今にも溢れ出そうになった感情を抑え、私に仮面を被らせた。[...] ちょっとでも感傷的な表現を見せると、それは子供らしさの証拠であり、そういう言行をするものは、まだ小僧っ子なのであった。[...] 私たちはただ大人らしく見せたいという奇怪な望みのために、子供らしい優しい愛着の純な喜びを失ったのである。（『幼年時代』、T. 1, C. 58—59）

トルストイにとっては、幸せなのは穢れない幼年期のみであり、成長するに従って、他人によく見られたいといった願望や、しっかりした人間に見られたいといった虚栄心によって、子供らしい純粋な感情は墮落していく。結果的にトルストイは、純粋で穢れないものの存在を常に想定するようになる。そして強い自尊心や見栄といったものの影響を受けない民衆が、その存在として現れる。トルストイにとって尊大な虚栄心の影響を受けないものとして貴族と対比される民衆たちは、常に純粋な、高次に位置する存在であり、「民衆は勤労と苦難に満ち溢れた人生のために、我々よりはるかに高い位置にいる」（T. 46 C. 95.）。

幼い少年ニコレンカは、彼の属する貴族世界の中で生活するうち、我知らず教育されるのであり、理想的な貴族像を追い求めて、ある意味彼なりに真摯に貴族社会に適応して行こうと努力していたといえる。そして、『青年時代』に描かれるように、大学入学後に最初は *comme il faut* でないという理由だけで軽蔑していた、貴族階級に属さない仲間たちと接し、彼らの内面的な純粋さ、知識の豊富さ、誠実さにふれるにつれ、自らの属する貴族階級の表面性と、無意味さに思い当たる。トルストイによる批判は、子供そのものに対してではなく、子供の純粋さを歪めていく貴族的な世界、教育に対するものである。

3. ルソーとの関係

三部作を通じて現れる *comme il faut* の概念への嫌悪は、当時彼が傾倒していた、18 世紀の巨大な思想家であるルソーの思想と、深い部分で繋がっている。¹⁹

トルストイ自身の記憶によれば、トルストイがルソーを崇拝し始めたのは 15 歳ごろのことであり、これは彼がカザン大学への入学準備をしていた 1843 年か、1844 年のことである。²⁰ 勿論トルストイとルソーと繋がり、後年まで長く続いていく非常に複雑なものであり、単純に語ることは出来ないが、『自伝三部作』の中にはルソーの、特に彼の『エミール』の深い影響が見える。²¹

ルソーによれば「万物を創るものの手を離れるときすべては良いものであるが、人間の手に移るとすべて悪くなる」²² のであり、人間がいつ何を学ぶべきかは、予め自然によって決定されている。教育者は子供の中の自然に合わせて、何をいつ教えるかを決めなければいけない。そして、ルソーは自然と社会の関係を対立的なものとして捉えており、自然の要求に反する形で社会的な教育がなされた場合、教育は人間を墮落させると考える。

ルソーの教育方法の第一原理は自由の尊重にある。それはあらゆる権威を排除するものであり、そのために強制的な働きかけをするものから子供を遠ざけねばならないと主張する。さらに、ここでルソーの教育論の中で注目しなければならないのは、教育の「階級志向性」についてである。

ルソーによって否定される教育の「階級志向性」については、『エミール』第一篇初めに述べられている。「すべての身分が烙印を押されている社会秩序の中では、それぞれの者は、自分の身分に向けて教育されざるを得ない」。これはつまり、国王、君主、王侯の子供は、国王、君主、王侯という「位置」(身分、階級)に向けて、それぞれ教育されるほかはない。

このように教育されざるを得ないのは、こうした「階級志向教育」が、これまでは一つに、現在の社会秩序にとっては、それを維持し、持続させるという機能を果たすものであったからであり、第二にこの教育を受けるものにとっては、将来この秩序の中で主人の座を占めるといふ、利益をもたらしてきたからである。ルソーはこの利益を、子供の「将来の幸福」と名付け、そしてこの「将来の幸福」を目指すところから、現在の教育は子供の自由を束縛する教育となり、それは子供の真実の教育を踏みにじる「残酷な教育」、言い換え

¹⁹ トルストイの思考と読書傾向が、同時代よりむしろ 18 世紀と密接に関係しているということは、エイヘンバウムをはじめ多くの研究者たちに指摘されてきた。Эйхенбаум.Б. Молодой Толстой // О литературе работы разных лет. М., 1987.

²⁰ 1901 年、フランス人教授 Paul Boyer は、トルストイをヤースナヤ・ポリャーナに訪ねた。当時 71 歳だったトルストイが語ったところによると、「私はルソーの全著作、占めて 20 巻を、『音楽辞典』に至るまで読破した。感激したどころの話ではない。私は彼を神のように崇めた。15 歳の時にはお守りの十字架の代わりに、彼の肖像を入れたロケットを首に掛けていた。書かれていることの多くがあまりに自分に近いことなので、私はそれを自分が書いたような気がした」。П.В.Брюкоф (原久一郎訳)『大トルストイ伝(1)』新潮社、1926 年、279 頁。

²¹ Vladimir Zborilek は、トルストイの母の愛読書だったルソーの『エミール』が、死亡した彼の母の印象と関係して、トルストイに強い印象を与えたと指摘する。Vladimir Zborilek, *Tolstoy and Rousseau: A Study in Literary Relationship* (Brno: Masaryk University, 1948), pp. 11–12.

²² ルソー (今野一雄訳)『エミール』岩波文庫、1962 年。

れば「教育」という名の子供に対する「抑圧」にならざるを得ないことを示す。²³

先に引用した『青年時代』の一節で、トルストイが *comme il faut* を批判する際に、それを社会と教育によって植えつけられた概念であると捉えていたことを思い返してもらいたい。トルストイにとって *comme il faut* の概念は、貴族階級において顕著に現れる、子供を自然状態から引き離し、その純粋さを破壊し滅亡へと導く、悪しき貴族教育の結晶であったといえる。

しかし、かつて作家トルストイ自身も、*comme il faut* の概念と外見や容姿を並列して、それに大きな意味を見出していた。青年時代のトルストイは、頻繁に生活のための規範を日記に書き込んでいた。次の例もその一つである。

社交界のための規範。難しい立場を選び、常に会話を牛耳るように努め、大きな声で穏やかに、はっきりと話し、努めて自分が話の糸口を作り、自分がその締めくくりをつけるようにすること。[...] 他人の前でためらわず喋ること。フランス語からロシア語に、ロシア語からフランス語に会話をやたら変えないこと。[...] 舞踏会では、一番主だった婦人と踊ること。万一、どぎまぎしても、自己を失わず、そのままの態度を持すこと。出来るだけ冷静に、いかなる感動も表さないこと。(トルストイの『日記』1850年12月8日、T. 46, C. 38-39)

上に引いた日記は、彼が22歳の時に書かれたものである。しかし後年、作家トルストイは、かつて自分が魅了された *comme il faut* の観念について、苦い悔恨と共に『幼年時代の回想』で次のように回想する。

カザンへ来てからばかりでなく、その前から私は、自分の外貌ばかり気を使うようになっていた——社交人らしく、*comme il faut* になろうと努力したのである。[...] カザンにきて初めて私たちは、彼に注意を向けるようになったが、それもただ、私とセリョージャとが、*comme il faut* とか外見とかに大きな意味を認めていたのに、彼は一向にだらしが無く、汚らしいので、私達がそれを非難していたまでのことである。彼はダンスをしなかったし、またそれを習おうともせず、学生として社交界に出ることも無く、狭いネクタイのついた制服のフロッカー一枚で通した。(トルストイ『幼年時代の思い出』、T. 34, C. 380-381)

作家トルストイ本人も、かつては *comme il faut* たらんと努力をしていたのであり、それは自伝三部作の中に描かれたニコレンカの姿と重なる。トルストイは貴族階級自体を、貴族たれ、*comme il faut* たれという、悪しき教育の温床とみなしていた。彼が後に農民教育に力を入れるのは、貴族階級に属する人間より遥かに純粋で、歪んだ教育に抑圧されぬ農民に対する深い愛情からであり、そこには彼が傾倒したルソーの教育観の影響が見える。

²³ 「階級嗜好性」と「排他的教育」については、鈴木秀雄『ルソー「教育」と「自然」』、明治図書出版、1984を参照。

4. «comme il faut»概念の変遷と変化

4-1. 兵士と対置される comme il faut

自伝三部作に描かれるトルストイの *comme il faut* 観のうち、この語句が環境によって植えつけられる貴族意識であるという点、そしてこの概念が常に否定的に取り扱われるという点については、三部作以降の作品群においても変わることがない。しかし、五十年以上に及ぶトルストイの創作人生を通じて、この概念にも若干の変更が加えられ、概念自体も拡大していく。この概念自体の変遷を追うことによって、トルストイの抱く貴族観、当時の貴族階級に対する疑問が明らかになるだろう。まず最初に *comme il faut* の変化が現れるのは、1856年の『陣中の邂逅』においてである。

1850年代半頃、カフカースでの戦争体験を基にした長編『カフカース』をはじめ、一連のセヴァストーポリものや、『襲撃』、『森林伐採』、『陣中の邂逅』などの戦場生活を題材にした作品群が描かれる。これらの作品において、トルストイは戦争自体については否定的であるが、勇敢な兵士や下士官については好感を抱いているといえる。

これらの戦争小説のうち、『陣中の邂逅』では、上流家庭の生まれながら決闘沙汰を起こし、カフカースへと送られる気位の高い俗物貴族グシコフが描かれる。まずグシコフと直接結びつく *comme il faut* 概念の描写を見てみよう。次に挙げるのは手稿に残された、社交界の花形であるグシコフを自慢する、彼の姉の描写である。

彼女のうちには有名な社交界と、よく知られた *comme il faut* に対するおべっかによってのみ表されるロシア的な、特にペテルブルグ的な貴族主義が高い段階に発達していた。この *comme il faut* を通して、彼らは歪んで曲がった目で、不誠実にこの神の世界を眺めるのである。そしてそれが正規の教育によって、あるいはさらにひどい場合には——社交界での成功によって植えつけられるために、どんな不幸せも、どんな影響も、この貴族主義を人間から追い払うことはできない。(T. 3,C. 275)

グシコフはいたずらに気位の高い、酔っ払いで、うそつきに成り下がった鼻持ちならない貴族青年であり、貴族的な作法と流儀を戦地にまで持ち込もうとする。戦地で他の兵士や士官に馬鹿にされながら、彼は社交界への復帰を願い続ける。

しかし女のいないこと、つまり僕の言うのは、*comme il faut* な女のことで、これは恐ろしい喪失ではないでしょうか。僕などは、今ほんの一分でも社交界の客間へ移されて、ちょっとした隙間からでも綺麗な女を見るためなら、何を与えていいかわからないくらいです。(T. 3,C. 94)

彼にとっては、自らの属していた貴族社会こそが唯一人間的で正常な世界であり、この世界の外部に存在する粗野で開けっぴろげな兵隊たちの世界は、貴族的な法と規範の通じない理解不能な世界である。彼の言によれば、「候補生たち（これはロシアで最も墮落した階級です）と兵士たち——これはなんらの人間的な感情をもたない、何かの獣」(T. 3,C. 276)

でしかない。

しかしトルストイの目に映る戦場においては、死はあらゆる人間に平等に訪れる。戦地にあつては、何らの階級意識も存在せず、無意味なものであるにもかかわらず、グシコフは、自分の属する貴族意識を誇示し、貴族以外の人間と同等の地平に立つことを嫌悪する。この嫌悪感は、例えば『陣中の邂逅』の初稿の、彼の台詞に良く現れている。

酒飲みや放蕩のために兵隊にやられた屋敷付きの下男の、どこかのアントーノフなんてやつと、夜通し谷間などに身を潜めて、いつ何時灌木の茂みから撃ちかけられるかわらない。そんな時には、アントーノフだろうと私だろうと、差別はない。こうなるともう勇気どころじゃない。恐ろしいことです。(T. 3,C. 277)

人間があらゆる階級を超越した戦場という極限状態に置かれるとき、*comme il faut* の下らなさ、無意味さが強調される。戦場という異質な人間たちの集まる場においては、フランス語の美しさや、美しいダンスの才能などは全く意味を喪失する。この点において戦場は『青年時代』で描かれる大学という異質な人間の集合する空間と繋がるのである。『陣中の邂逅』の戦場という「場」も、『青年時代』に描かれる大学という「場」も、同様に社交界の規範の影響を受けない。そこでは、流儀やマナーなどの外面的な価値は破棄され、より根本的な人間性の魅力や、勇敢さというものが価値基準として尊重される。

4-2. 予審判事、大審院議員と結びつく *comme il faut*

時代が下り、1880年代に入ると、トルストイの *comme il faut* 観も、さらに変化を見せる。ここでとり上げるのは、『イワン・イリイチの死』(1886)、『にせ利札』(1903-1905)、『復活』(1895-1899)の三作品である。これらの作品で *comme il faut* は、予審判事、大審院議員と結びついて描かれる。

『イワン・イリイチの死』の主人公イワン・イリイチは、上品で *comme il faut* な形式的生活を身上とし、実生活に対して無関心な貴族として描かれる。ここで初めて *comme il faut* な人間と予審判事とが結合した形で語られる。

都からやって来た侍従武官と酒を飲んで、食後に町外れのある場所に遠征もした。[...] しかし、これらはすべて極めて上品な風格を帯びていたので、悪い言葉で呼ぶことなど出来なかった。[...] これら全ての行為は、綺麗な手をして、綺麗なお仕着せを着込み、フランス語を喋りながら、極めて上流の社会で行なわれた。[...] イワン・イリイチは予審判事としても、特務官吏のときと同じように *comme il faut* であり、上品であり、勤務上の義務と私生活を区別して、一般の尊敬を呼び起こすことが上手かった。(『イワン・イリイチの死』、T. 26,c71)

『にせ利札』に登場する少年マーヒンは、浅はかで遊び好きな不良中学生である。彼が利札の額面を書き換えることによって、多くの犯罪が連鎖的に生じるが、彼自身には罪の意識は全くない。後年、大学の法科を卒業したマーヒンは予審判事に任命される。彼は『青年時代』のドゥブコフと同様、職務に不誠実で女たらしという特徴づけがなされている。

あんな子供たちが、——中学生が私をだますなんて、私だって考えもしません。若くて、綺麗な子供たちで、本当に *comme il faut* な (комильфотный) 人たちだったのだもの」(T. 36,C. 9)
「[...] 彼は女に成功したおかげで、特に次官である老人の昔の愛人に愛されたおかげで、まだ若いのに予審判事に任命された。(T. 36,C. 40)

『復活』に登場する大審院議員のヴォリフも、イワン・イリイチと同様、*comme il faut* の資質のみによってその地位を得、賄賂を取り、多くの無辜の人々を滅ぼすことを破廉恥とも思わない。

ヴラジミール・ヴァシーリエヴィッチ・ヴォリフは、実際極めて *comme il faut* な人物であった。彼はこの資質を何よりも高く評価し、その高みから他の全ての人々を見下ろしていた。また彼はこの資質を高く評価しないわけにはいかなかった。[...] ヴォリフは愛想のいい幾らか嘲るような微笑をうかべて (それは多くの人々に対する自分の *comme il faut* の優越感を表す無意識の癖だった) 足を止め、ネフリュードフに挨拶して、手紙を読んだ。(T. 32,C. 257-258)

上に挙げた例に見られるように、*comme il faut* と裁判官、または裁判制度全体が分かちがたく結びついて提示される。この結合によってトルストイが何を読者に開示したかったのか。そしてこの *comme il faut* 概念の変化は何によってもたらされたのだろうか。この変化を正しく理解するために、1883年に書かれた『わが信仰』(в чем моя вера)を見てみよう。『わが信仰』には、トルストイの裁判に対する意識が如実に表れている。彼はマタイ伝第7章1の「人を裁くな、自分が裁かれないためである」という叙述を念頭に置き、世間一般の「法」と聖書に描かれた神の「掟」が、まったく矛盾するものであることを繰り返し語る。

仮に私が農民だとしよう。私は小作頭に、裁判官に、陪審員に選挙される。宣誓をして、裁判をし、処罰をするように仕向けられる。——どうもこれはやむをえない。またしても私は神の法律と、人間の法律とのうち、一つを選択しなければならなくなる。(T. 23,C. 317)

人が人を裁き、場合によっては死へと駆り立てる陪審員制度と裁判制度は、トルストイの目には反キリスト的な法律として映る。彼によれば、人間の個人生活は一般的な国家生活と融合しているが、国家生活はキリストの掟に反する非キリスト教的活動を要求する。そしてこの矛盾は、国民皆兵の義務と全ての人の陪審員としての法廷への参加とによって生じるのである。たとえキリスト教の熱心な信者であろうとも、人が国家のうちに生活している以上、「各個の市民は裁判所におもむき、裁判と処刑との協力者とならなければならない。つまり各人は単に言葉によるだけでなく、行為によっても、悪に対して無抵抗なれというキリストの掟を拒まなければならない」(T. 23,C. 318)のであり、「単に隣人を言葉によって裁かないだけではなく裁判によって人に処刑の決定を与えるな、隣人を自分たちの人間的な施設に基づいて裁くな」(T. 23,C. 319)と声を限りに叫ぶのである。

こうして社交界において高い地位を占め、社交人たちの尊敬を集める人間でありながら、

他人を裁き、死へと導く反キリスト教的な者たち——予審判事や、裁判官たちが *comme il faut* の体現者として登場することになる。ただし、これらの反キリスト教的な裁判官たちも、自ら進んでこのような状況を受け入れたわけではない。彼らにも、まだ *comme il faut* から脱するための救いの道が残されている。

『イワン・イリイチの死』、『にせ利札』、『復活』の三作品には共通して、自らの属する「歪んだ体系」からの脱出という主題が扱われる。ここで言う「歪んだ体系」とは、勿論 *comme il faut* であるということに至上目的とした、貴族社会のことである。トルストイの批判の対象は、その体系内にありながら、システムの醜悪さに気づかないで生活し続ける行為と、イワン・イリイチやヴォルフたちの模造品を作り続ける体系自体に向けられている。

かつて上流社会の中で生き、*comme il faut* の体現者であった、帝政ロシアの典型的な官吏として登場するイワン・イリイチは、いつでも軽妙かつ上品に、作法どおりに振る舞い、何事にも深入りせず、全て形式に従って処理して生きてきた。しかし彼は臨終の床にあって、初めて自分の生きてきた上流社会の体系の枠外に出て、その歪んだ社会を見直す機会を得る。

「以前にはあり得ないと思われていたことが、——つまり、自分が今まで道を外れて生きてきたのだということが、本当かもしれないという疑念が——ふと彼の心に浮かんできた。社会で最高の地位を占めている人々が善とみなしていることに対して、彼が反対しようとした極めて微かな心の動き、彼がいつもすぐに追い退けようとした極めて微かな心の動き、唯それのみが本当のものであって、他のものは全て偽者かもしれないという考えが、心に芽生えた。職務も、生活の営みも、家庭も、社交や勤務上の興味も、全て偽者かもしれないのだ！」『イワン・イリイチの死』(T. 26,c80)

イワン・イリイチが死と向き合って悟るのは、上流階級の社会は、全ての人間が入れ替え可能な表面的なシステムであり、それぞれの人間が他人のことには目を向けず、体系内で与えられる役割をこなし、疑いもなく生きているということである。しかし死を前にして、周囲の者がかつて彼自身が尊重してきた儀礼に従って、彼の死を単なる不快な出来事として扱うのを見たとき、彼はこの貴族社会の体系から抜け出て、今まで疑いも持たなかったその欺瞞に気づくのである。臨終の床にあるイワン・イリイチの脳裏に浮かぶ、落下のイメージ、体ごと「黒い袋」を通過するイメージは出産のメタファーとして受け取れるし、死に近づくにつれて彼が示す一連の兆候（甘える、泣く、言葉がもつれる）は、表面的なシステムに汚される以前の幼年期への回帰を意味していると取れる。

『にせ利札』のマーヒンも、自分が生い立った虚偽の世界の窮屈さに気づいたリーザの無償の愛によって開眼し、「歪んだ体系」の外の新しい世界へと足を踏み出していく。

そしてトルストイ最晩年の作品『復活』においても同様のテーマを見ることが出来る。穢れのない純粋な少年期を送ったネフリュードフは、ペテルブルグという都会生活、社交界の生活のうちに暮らすことによって、周囲のすべての人に推奨される新しい生活に没頭し、何かしら別のことを要求する心の声をもみ消してしまう。しかし、かつて彼の犯した

小間使いの娘カチューシャとの出会いにより、自らの属していた社会に目を向け、愚かで空虚な、目的もない無価値な生活の罫に周りから取り囲まれていたことに思い至り、苦悩する。

今の彼にとっては、この人生の一端は単純明快で、自分の置かれている生活条件に規定されるものだった。あの当時、彼にとって必要であり重要であったのは、自然との交流、自分よりも前に生き、思索し、感じていた人々（哲学者や詩人たち）との精神的交流だったが、今の彼に必要で重要なのは人間の設けた制度や、同輩たちとの交際だった。（『復活』、T. 32,C. 47）

彼が自ら善と思っていた一切のことが、他人には悪と見なされていたし、その反対に彼が自ら信じながら悪と見なしたものが、彼を囲む全ての人々によって善と考えられていたからである。ネフリュードフは己を信じることを止め、他人を信用するようになった。[...] こうしてネフリュードフは周囲のすべての人に推奨される新しい生活に没頭し、何かしら別のことを要求する心の声をもみ消してしまった。これは彼がペテルブルグに移ってから始まり、軍務に付くと同時に成就されたのである。（『復活』、T. 32,C. 49）

主人公ネフリュードフは、幼年期の自分を振り返り、かつてははつらつとした自由な青年で、その前途には無限の可能性が開けていたことに思い当たる。しかし今の彼は愚かで空虚な、目的もない無価値な生活の罫に周りから取り囲まれて、逃れようがないと感じている。ここでも、自伝三部作で提示されたテーマを見る事が出来る。結果的に、『復活』のなかで *comme il faut* の体現者として描かれた大審院議員ヴォルフは、最後まで自らの属する「歪んだ体系」に気づくことはない。ヴォルフは主人公ネフリュードフの対立項として描かれ、ネフリュードフの劇的な回心と、その正当性を浮き立たせる役割を担っている。

自伝三部作のなかでは *comme il faut* の概念が、貴族社会という特殊な環境と教育によってまだ歪められていない、純粋で無垢な子供と対置されていた。『陣中の邂逅』に描かれた *comme il faut* は、勇敢で向こう見ずな兵隊、あるいは戦地との対立項として現れる。さらに『イワン・イリイチの死』、『にせ利札』、『復活』などの後期作品では、*comme il faut* は判事や裁判制度と結びついて描かれることになる。一般的に回心後のトルストイの作品群はその他の作品と違い、道徳性の問題や、性欲、男女間のモラルのあり方に焦点を当てて論じられる傾向があるが、以上見たように、『イワン・イリイチの死』、『にせ利札』および『復活』に見られる「人間本来の持つ純粋さを失わせていく社会と階級意識」というテーマ、または「その体系内からの脱却」というテーマは、実際にはトルストイの自伝的な最初の小説『幼年時代』を含む自伝三部作において、すでにその原型が形作られているのである。